

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1017 号	氏 名	三 枝 達 也
論文審査担当者	主 査 駒津 光久 副 査 岡田 健次 ・ 今村 浩		

### (論文審査の結果の要旨)

外科的治療適応があり術前冠動脈造影を施行された大動脈瘤 191 例のうち、胸部大動脈瘤は 34 例、腹部大動脈瘤は 137 例、胸腹部大動脈瘤は 20 例であった。74 例 (38.7%) で虚血性心疾患を認め、特に腹部大動脈瘤 137 例 (40.9%)、胸腹部大動脈瘤 20 例 (55.0%) で多く合併を認めた。単枝病変 42 例 (56.8%)、左前下行枝病変 57 例 (44.9%) が多く、術前に 40 例 (54.1%) に冠動脈の血行再建を施行した。

冠動脈病変は、大動脈瘤症例全体の検討では、単変量解析で HDL-C と逆相関 ( $p=0.009$ )、腹部大動脈瘤と正相関 ( $p=0.038$ ) を認めた。多重ロジスティック回帰分析では、高血圧、LDL-C、HbA1c、喫煙、スタチン服用による調整下で HDL-C (Odd ratio 0.630、 $p=0.010$ ) と腹部大動脈瘤 (Odd ratio 3.331、 $p=0.036$ ) が虚血性心疾患の独立した予測因子であることが示された。

胸部大動脈瘤の検討では、単変量解析で喫煙と虚血性心疾患の関連を認めたが、多変量解析では独立した予測因子にはなり得なかった。腹部大動脈瘤症例の検討では、単変量解析で HDL-C が虚血性心疾患と逆相関 ( $p=0.041$ ) を認め、多変量解析で唯一独立した予測因子であった (Odd ratio 0.646、 $p=0.041$ )。一般的な冠危険因子である高血圧、LDL-C、HbA1c、喫煙歴は関連を示さなかった。

ROC 曲線を用いた虚血性心疾患を予測し得る HDL-C のカットオフ値は 47.5mg/dL で、感度 54.8%、特異度 62.7%であった ( $p=0.018$ )。

その結果 三枝達也は次の結論を得た。

1. 本研究は外科的手術適応のある大動脈瘤症例における虚血性心疾患の予測因子を検討した最初の研究であり、HDL-C の低値が虚血性心疾患の唯一の予測因子であった。
2. 末梢血管から肝臓にコレステロールを転送する HDL-C 作用が動脈硬化疾患予防の重要役割を担っているとの報告があり、今回の HDL-C と虚血性心疾患の関連を示唆するものである。
3. これらの結果から、大動脈瘤術前患者において HDL-C の測定は虚血性心疾患を予測する上で有用であり、術前リスクを層別化する一つの判断項目になる可能性があると考えられた。

本論文は大動脈瘤術前患者における虚血性心疾患の予測因子について検証した臨床上有意義な研究であり、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。